

プログラム名 (40字以内)	帰還困難区域の「まちづくり」を考える。―「復興」の記憶と未来をつなぐ現場から―		
団体名/所属	本学学生(担当教員:情報学環社会情報学圏 開沼博准教授)		
活動区分	フィールドワーク体験活動	希望する選考方法	書類審査のみ
募集人数	4人	選考対象	大学院学生を含む
活動方法	オンラインを活用しつつ現地活動を行う		
参加者に求めるもの	特になし(学部学生、大学院学生共に参加を歓迎する)		
活動期間	夏季休業期間中に断続的に実施する(詳細は「具体的な内容」に記載する)。	主な活動予定場所	福島県
プログラム実施の目的	復興における長期的な課題に対して理解を深めること。		
具体的な内容(800字程度)	<p>【企画概要】</p> <p>2011年3月11日の東日本大震災および福島第一原子力発電所事故から15年。原子力災害で長期避難を強いられた福島県双葉郡は、震災と原発事故という複合災害によって地域の社会経済基盤に大きな打撃を受けた。その後、除染やインフラ整備、公営住宅や学校、診療所の再建、新産業創出を目指した復興事業など、制度や政策面からの「復興」は着実に進められてきた。</p> <p>一方、居住人口の回復は限定的で、事業の採算性や担い手不足、コミュニティの維持・再構築など、人々の生活や生業に関わる「復興」は依然として道半ばにある。医療・介護・福祉、教育、日常的な買い物などの生活環境にも多くの課題が残されている。福島の復興は外部から実感を捉えにくく、廃炉やALPS処理水といった大きな論点の陰で、地域で生きる人々の日々の実践や思い、葛藤は埋もれがらである。さらに、震災から時間の経過とともに福島について語られる機会が減少していることも懸念されている。</p> <p>本プログラムでは、現在も帰還困難区域が残る浪江町、双葉町、大熊町、富岡町を訪問する。各参加者の関心ごとにチームに分かれ、問いを立てながら住民や行政担当者への聞き取り、現地視察、参加者同士の議論を通じて、この地域における「復興の現在地」を多角的に考察し、現地の方々に成果をフィードバックする。これまで福島や復興・災害分野に関心がなかった参加者でも、現地の人々の視点に寄り添いながら「復興」の背景にある思いや課題、可能性を探り、新たな気づきや学びを得ることができるプログラムを目指したい。</p> <p>※過去の当プログラムの様子は以下のURLよりご覧いただけます。 (2025年度) https://campus-map.jp/ut/report/087/ (2025年度) https://ut-base.info/programs/46 (2022年度) https://www.iui.u-tokyo.ac.jp/research/221004kainuma</p> <p>【プログラムの魅力】</p> <ul style="list-style-type: none"> 希望者は成果を研究に発展させることも可能である。過去、学部2年生で学会発表を行った参加者や学会で受賞した参加者もいる。 現地調査やヒアリング、議論を通して、問いを立てる力や実践的な課題解決力など、学業や就職活動にも活かせる実践的なスキルを身につけられる。 幅広い専攻の学部1年生から大学院生まで参加可能で、多様なバックグラウンドを持つ参加者と交流しながら学べる。 <p>【スケジュール】(暫定版)(現地活動は計3回、計7日程度。議論はオンライン中心の予定)</p> <ul style="list-style-type: none"> 7/24(金):キックオフミーティング(対面を予定) 7/31(金)~8/1(土):現地活動1回目 ~議論を継続~ 8/24(月)~8/26(水):現地活動2回目 ~議論を継続~ 9/25(金)~9/27(日):現地活動3回目&最終報告会 		
【総額】参加するための費用	90,000円		
【内訳】参加するための費用(宿泊費)	50,000円程度		
【内訳】参加するための費用(交通費)	30,000円程度		
【内訳】参加するための費用(その他)	10,000円程度(現地活動費として)		
奨励金額(予定)	25,000円		
備考	特になし		
活動に関する関係資料のダウンロードサイト			
応募団体を紹介するウェブサイト等(団体で応募の場合)			
この企画に対する担当者(応募団体)の参加の有無	参加する		